

安部公房の読者のための通信 世界を變形させよう、生きて、生き抜くために！



月刊

もぐら通信

Mole Gazette for Kobo Abe's Readers

2014年4月30日初版 第20号

www.abekobosplace.blogspot.jp

あなたへ：
迷う事のない迷路を通して
あなただけの番地に届きます

このもぐら通信を自由にあなたの「友達」に配付して下さい



場の位相

「田園」池田龍雄

2010.6

田園まさに荒れなんとす
いやすでに荒らされている
迅速なこの文明によって

野よ

山よ

川よ

君らに託す切実な願いは
自然の摂理に従うことだ
自然の掟を守れ

そうすれば健全

原初の健全な姿に戻れよう

ニュース & 記録

(<http://seesaawiki.jp/w6allen/>)

池田龍雄先生の新聞連載

安部公房の朋友で、画家の池田龍雄先生の記事「わたしの百物語」が西日本新聞で4月15日より連載開始されました。

<http://c.nishinippon.co.jp/announce/2014/04/post-296.html>

大場健司さんの論文

九州大学の**大場健司**さんが、**九大日文**にて、「安部公房『燃えつきた地図』とナサニエル・ホーソーン「ウェイクフィールド」—安部公房のアメリカ文学受容とジャン＝ポール・サルトル、大橋健三郎」（「九大日文」23号、九州大学日本語文学会「九大日文」編集委員会、2014年3月31日、95—113ページ）という論文を上梓されました。

目次

表紙：池田龍雄

- 1。ニュース&記録…page 2
- 2。目次…page 3
- 3。安部公房×勅使河原宏『1日240時間』の復元上映～研究ノート～：
友田義行…page 4
- 4。安部公房氏との打ち合わせ記録（最終回）：長与孝子…page 10
- 5。さまざまな安部公房：滝口健一郎…page 16
- 6。私の本棚より：ヤマザキマリ著『男性論』：タクランケ…page 17
- 7。三島由紀夫の『愛の処刑』と安部公房：岩田英哉…page 21
- 8。もぐら通信の編集部員を募集します…page 30
- 9。ご寄稿に際してのお願い…page 32
- 10。訂正箇所…page 33
- 11。読者からの感想…page 34
- 12。合評会…page 37
- 13。本誌の主な献呈送付先…page 37
- 14。本誌の収蔵機関…page 37
- 15。編集方針…page 37
- 16。個人情報保護方針…page 37
- 17。バックナンバー…page 37
- 18。もぐら通信のwiki…page 37
- 19。編集者短信…page 38
- 20。編集後記…page 39
- 21。次号予告…page 39

お知らせ：電子媒体(PDF)で閲覧されている場合、ツールバーにページ数を入力して検索すると、恰もジャンプ・シューズを履いたかのように、そのページにジャンプします。

安部公房×勅使河原宏『1日240時間』の復元上映

～研究ノート～

信州大学教育学部 友田義行

1、はじめに

2014年3月1日、東京大学本郷キャンパスの福武ホールで、「記録映画アーカイブ・プロジェクト 第12回ワークショップ」が開かれた。このワークショップは、記録映画のアーカイブを活用して、映像を用いた多様な研究・教育の可能性を再発見することを目的としている。今回は「戦後史の切断面」シリーズの第3回目として、1970年に開催された大阪万博のパビリオン映像が特集された。

上映作は、『ニュース映画で見る万博』、東芝・IHI館『希望一光と人間たち』（藤久真彦監督）、せんい館『スペース・プロジェクション・アコ』（松本俊夫監督）、そして自動車館『1日240時間』（勅使河原宏監督）である。『1日240時間』の復元については本誌でも紹介したことがあるが、このたび映像と主音声の復元が一通り完了し、44年ぶりとなる再上映が実現した。この映画の詳細な内容分析についてはすでに他の場所に書いたので（*1）、ここではワークショップでの発表や議論を踏まえた、作品紹介と考察を報告しておきたい。

2、ストーリーとテーマ

「1日240時間」は、安部公房が脚本を、勅使河原宏が演出を務めた、二人にとって最後の協働映画である。ストーリーを簡単に紹介すると――時は現代の中の未来、場所は誰でも知っている都会。とある生化学研究所でX博士が助手Aと加速剤「アクセレチン」の実験に成功する。アクセレチンを一吸いすると、世界はたちまち一変し、せわしかった人や車の動きはまるで止まるかのようにのろく感じられる。X博士はこの不思議な薬の誕生を全世界に向けて発表した。アクセレチンを服用すると10倍のスピードが得られ、1日が24時間から240時間になってしまうのだ。もっと時間があつたら、と望んでいた人々にとって、それは何と有り難いことだろう。労働時間は10分の1に短縮され、人々は豊かで自由な時間を手に入れた。さて、映画の登場人物たちはこの薬によってどんな自由を獲得し、どの

ように生活を変化させただろうか——。

人間の神経反応速度を10倍にする「アクセレチン」という架空の薬品をめぐる、空想科学映画である。より素速くより力強く移動できたり、自由に使える時間を拡大したりするもの——すなわち自動車を、架空の薬品に置き換え、それを服用することで自動車としての人間身体を表現している。

この設定には無論「自動車館」で上映されるという前提がある。万博には統一テーマがあり、それに次ぐサブ・テーマがあり、さらに各パビリオンのテーマがあった。出品者はこうしたテーマを前提に創作にあたることとなる。万博の統一テーマが「人類の進歩と調和」であったことはよく知られる。「自動車館」では、サブ・テーマの一つである「より好ましい生活の設計を」の範疇に、「リズムの世界」というテーマをかかげ、「未来の都市交通の理想化をめざした」という。このテーマの創設には安部公房も深く関わっており、現代社会を構成する様々なリズムの中でも、自動車の機能がとくに重要な欠かすことのできないリズムの一つだと述べている。「自動車館」では映画だけでなく、電気自動車の実演や自動車楽器の展示もあり、こうしたテーマを具体化していた。また、映画『1日240時間』も、スローモーションやファストモーションを駆使したミュージカルによるリズム表現が見られる。

3、スクリーンの実験

ところで、『1日240時間』で最も注目されたのは、上映形態であった。ワークショップでは一つのスクリーン上に四つの映像を合成する形で上映したが、実際の会場では客席正面に加えその左右と上部の計四面の巨大スクリーンが設置され、35ミリ映写機4台による同時投影が行われていた。上部スクリーンは縦長で、客席に覆い被さるような角度で掲げられ、客席も最前列に立見のスペースが設けられるなど、通常の映画館とは異なる仕様であった。

日本映画に限らず、あらゆる映画は伝統的に単独のスクリーンで上映されてきた。四面マルチ・スクリーンの本作は、そうした基本的な約束事をあえて破ってみせたと言える。ちなみに、大阪万博の会場では、本作に限らずマルチ・スクリーン映像が氾濫していた。数々の映像を展示する流れは、1964年のニューヨーク万博からすでに始まっており、大阪万博はこの潮流を継いだことになる。ただ、当時の観客の感想を見てみると、映像の洪水に圧倒されて、内容はほとんど理解されなかったようだ。しかし、だからこそ、現代の視点で万博映像の意義を再検討する価値があるのだ。

『1日240時間』では、たとえばあるスクリーンから別のスクリーンへの越境が

実践された。登場人物はスクリーンの枠を越えて移動する。人物は、固有の時間と空間を割り振られたそれぞれのスクリーンを、カットによる時間や空間の省略なしで自由に往来することになる。

こうしたマルチ・スクリーンの実験は、これまで時間の秩序に沿って行われてきたモンタージュに、空間の秩序という新しい側面を追加することになった。荻昌弘が当時から指摘していたように、マルチ・スクリーンによって、モンタージュ理論は、初めて同時性や平行性や対位法を獲得することができたのである（*2）。

ところで、時間と空間に新しい側面を加えたという意味では、この映画の題材となっている自動車にも同様のことが指摘できる。自動車は遠く離れた場所に移動するための時間を短縮した。そして、それまでにはなかった空間と空間の結びつきを可能にした。人々は走行する自動車の窓から風景を眺めるようになり、それと対応して、都市空間も姿を変えていった。たとえば、小松左京はこの時期に、高速道路から見える団地や高層ビルが形づくる、新たな都市の美学を提唱している。そういえば、四面スクリーンは、フロントガラス、ドアガラス、そしてルームミラーとも対応し、運転席からの眺めに似ていなくもない。

そして、自動車によって移動や労働のための時間が短縮された分、人間が自由に使える時間は拡大されるはずであった。しかし、そうでもなかったようだ。

『1日240時間』は、自由を獲得したはずの人間が、その自由を持って余す様子や、欲望に駆り立てられてますます憔悴する姿を、批判的に暴き立てている。

4、始原的道具というモチーフ

さて、『1日240時間』は、アクセレチンという架空の薬や、上下左右のマルチ・スクリーンによって、自動車というものを表現した。しかし、映画の結末で奇妙な出来事が起こる。アクセレチンを飲んで加速した博士が、タイヤに変身してしまうのである。変身は安部公房の文学でよく描かれるが、ここではなぜ、たとえば一台の自動車ではなく、タイヤへの変身を描いたのだろうか。

詳細は別稿を参照いただきたいが（*3）、タイヤに焦点を絞っていく作品構成は、『1日240時間』に先立つ試作品から一貫するものであった。なかでも注目したいのは、試作版シナリオ『ポップ・ラップ・ヘップ』のラストシーンである。やはり人物がタイヤ（「車輪」）に変身したあとで、こんな文字が表示される。「《車輪の発明は人間の効率を430倍以上も高めたという。》めまぐるしく交錯する、様々な車輪の群。高速道路を走る車のタイヤ。巨大な特殊作業車のタイヤ。機械の歯車。等々——」（*4）。

先ほどの引用内に、《 》で括られた文言があった。ここでの言葉は、1960年に書かれた安部の短篇『なわ』を連想させる。この作品の結末部は次のように描かれている。「「なわ」は、「棒」とならんで、もっとも古い人間の「道具」の一つだった。「棒」は、悪い空間を遠ざけるために、「なわ」は、善い空間を引きよせるために、人類が発明した、最初の友達だった。「なわ」と「棒」は、人間のいるところならば、どこにでもいた」（*5）。

「縄」に加えて「棒」が、はるか昔からの人間の道具であり、発明品であり、身近な友達であったと書かれている。「棒」といえば、安部には「棒」という小説があるが、作中に次のようなくだりがある。「棒はあらゆる道具の根本だともいえるんじゃないでしょうか。それに、特殊化していないだけに、用途も広いのです」（*6）。

棒は、「あらゆる道具の根本」であるという。このほかにも安部は、1973年に演劇グループ「安部公房スタジオ」を立ち上げて、自らの舞台に「布」を多用していた。そのことを指摘された安部は、次のように述べている。「あれは一種の存在の原型といった意味で使ってるんで、布っていうものは、恐らく人間にとって、最初に棒を道具として持ったと同じくらい古くから、……布じゃなくても動物の毛皮でも木の皮でもいいんだけど、……人間の皮膚の延長として利用したと思う」（*7）

「存在の原型」としての布、そして「皮膚の延長」としての布、という言葉が出てくる。また、ここでもやはり古き道具として「棒」が引き合いに出される。

こうした作品や発言からうかがえるように、安部は「古来からの始原的な道具」に強い関心を持ち続けていた。ほかにも、「鞆」という短篇や、『箱男』という長篇小説もある。縄、棒、布、鞆、箱…。『1日240時間』のシナリオであえて「車輪」と表記された自動車のタイヤも、始原的な道具をモチーフとした作品の系譜に位置付けることができる。車輪もまた、人類史における最初期の発明品のひとつであるから。

5、車輪がつなぐ自動車と映画

大阪万博に先立って、1964年にある重要な研究書が出版された。1967年に邦訳が刊行された、マーシャル・マクルーハン『人間拡張の原理』である。今もメディア論の古典として読み継がれているこの本に、次のような一節がある。「車輪を、最も進んだ、最も複雑な方法で利用しているものは、映画の撮影機と映写機である」。

一見突拍子もないような学説だが、マクルーハンが、車輪が「歯車」に応用され、極めて複雑微妙に組み合わせることで撮影機と映写機が成立していることに着目している。また、撮影機と映写機が、もとをただせば「馬の脚」にまでさかのぼるとも指摘している。これにはE・J・マレーの写真銃のエピソードが下敷きになっている。すなわち、疾走する馬の脚がどのような状態なのかを明らかにするために誕生した写真銃（連続写真撮影機）が、映画の始祖になったという映画史である。マクルーハンの言葉を引用すれば、「「拡張された脚」で始まった車輪は、ついには「映画館」の設立を招くにいたる、大きな革命的な一歩を踏み出した」ことになる。

自動車は、戦後日本が世界に誇った科学技術の結晶であり、日本の高度経済成長を支えた輸出産業品であった。『1日240時間』はその自動車を題材にした作品である。また、上映形態も、四面マルチ・スクリーンという、これまた科学技術の最先端を披露するものであった。ところが、この映画は単に最新の科学技術を展示しただけのものではなかった。自動車と映画の起源になった、人類史における伝統的な題材を中核に置いたのだ。それこそがすなわち、「車輪」であった。

安部の事実上の師であった花田清輝は、1959年に発表された著作のなかで、「前近代的なものをスプリングボードにして近代的なものを超える」というテーゼを掲げていた（*8）。内容と形式の両面において、近代と前近代を共存・葛藤させたこの映画は、戦後アヴァンギャルド芸術理論の旗手であった花田のテーゼに基づいたものであったとも言える。

大阪万博は、前衛芸術家たちが国家や資本に絡め取られていった舞台だとの批判があった。ただ、少なくとも『1日240時間』は、自動車工業会から莫大な資金を獲得しながら、最先端の自動車を紹介するのではなく、未来の自動車社会を言祝ぐこともしなかつた。よりによって車体を支える「車輪」に焦点を絞ることで、古代から現代まで我々の生活を支えている文化について、考える契機を提供して見せたのである。

附記

なお、今回の上映ではいくつかのシーンで効果音が欠けたままとなった。「1日240時間」の音声は当時の機材でしか再生できないメディア（1インチ8チャンネルのアナログ磁気テープ）に残されており、全ての音声を取り出すことができなかったためである。しかし、残りの音源についても、記録映画保存センターの村山英世氏の協力を得て、技術的な問題を乗り越えることができそうである。近

い将来、音源を完全にそろえた再上映を行いたい。

注

- (※1) 拙稿「安部公房と日本万国博覧会——勅使河原宏との協働最終章」（鳥羽耕史編『安部公房 メディアの越境者』森話社、2013年12月）
- (※2) 荻昌弘「万博映像総批判論VI」（『キネマ旬報』1970年10月上旬号）
- (※3) *1と同じ。
- (※4) 安部公房「ミュージカル・コメディ パップ・ラップ・ヘップ——愛の法則」（『安部公房全集』第23巻、新潮社、1999年）
- (※5) 安部公房「なわ」（『群像』1960年8月号）
- (※6) 安部公房「棒」（『文芸』1955年7月号）
- (※7) 安部公房「演劇のアナログ感覚」（『安部公房全集』第26巻、新潮社、1999年）
- (※8) 花田清輝『近代の超克』未来社、1959年

ご寄稿の募集

もぐら通信では、読者であるあなたのご寄稿をお待ちしております。

安部公房についての、どんな文章でも構いませんので、お寄せ戴ければ、ありがたく存じます。

お寄せ戴くどんな言葉も、もぐら通信発行の励みとなりますし、また他の読者の方達との共有の財産となり、わたしたちの交流を深めることでしょう。

お寄せ下さる場合には、下記のメールアドレス宛にご連絡下さい。

次号に掲載したいと思えます。

編集部一同、こころからお待ちしております。

連絡先：eiya.iwata@gmail.com

安部公房氏との打ち合わせ記録（最終回）

～「長与日記」より・NHK放送番組関連～

長与孝子

1959年(昭和34年)

9月9日(水)

5月11日(月)から毎週月曜～金曜の放送で行われて来た連続ドラマ、安部公房作「ひげの生えたパイプ」も、9月4日(金)の放送をもって終了した。ここには、安部公房氏の歴史、教育、文学に対する認識のすべてが結集されていたと思う。しかも、あまりにも奇抜で変化に富んだ豊かな想像力と、これが最も貴重な氏の独壇場なのだが、風刺性に満ちたユーモア、行動自体が起こす滑稽き、論理を徹底的に突き詰めることから生まれる逆説的をかしさ。これは、氏の比類なき才能と、人間観察の鋭さから来るものであり、日本では、勿論のこと、世界的にも氏以外に作家と呼べる人は居ないと、私は思っている。しかし、NHKの上層部では全く理解に苦しんだようだったし、一般聴取者も、当初はとまどいと批判が多く、何でも実現してくれる魔法のパイプに魅せられて、太郎が学校をやめてしまう場面などでは、非難の投書が山積みとなり、私は視聴者対策室に呼ばれて返事を書くよう強要されて大忙しだった。特にうるさかったのは、いわゆる教育熱心な母親からであり、例えば、太郎が遠足で登呂遺跡に行き、先生を驚かせてやろうと、パイプに何かすごい遺物を出してくれと頼んだら、全く歴史知識のないパイプがギリシャの古代遺物を出してしまい、文化委員まで困り果てる所などでは、子供の教育上害があるとの怒りの投書で埋まる始末。この場面などは、私は読んで大笑いしたものだとし、こう言う投書者こそ、安部氏が最も聞いてもらいたい人種ただらうと思う。しかし、考えてみれば、これだけ反響があると言う事は、それだけ聞いている人が多いと言う事で、喜ぶべきことなのだ。とにかく演劇界からもテレビ界からも、新聞などのジャーナリズムからも、多大な関心を持たれていたようで、先ず毎日新聞が人気番組として大きく取り上げ、続いて読売、東京各紙、共同通信社にも出たので(もともと、これは私の親戚が建てた同盟通信が元になっている会社で、主要ポストは殆ど親戚が握っているので、それを利用したと言う政治性もあるが、まあ「ひげの生えたパイプ」が潰されるよりはいいだろう。)そのおかげで、地方新聞も大きくとりあげてくれた。新聞に

好評の報が載りだすと、不思議なもので、非難の投書も次第に減り、代わって好意的な投書が増えて行った。

最も意欲を燃やしていた「ひげの生えたパイプ」が終わってしまっていたので、気がぬけたようになり、その打ち上げ会を開くことにした。予算削減で今までのように公費では出来ないのでも自費。修善寺一泊旅行。宿は、主人公太郎役の大山羨代嬢の友人富士真奈美の叔父の宿屋で安くしてくれる由。今日10時45分東京発、京都行き鈍行に乗る。パイプ役の熊倉一雄初め、効果音担当のスタッフも加わって総勢十二名。7号台風のため橋が壊れていて大仁からバスで修善寺入り。野田屋に泊まる。先ずビールで乾杯。その頃、大阪でミュージカル公演中だができたら行きたいと言われていた安部公房氏から電報あり。「ツゴ ウワルク ユカレヌ カワリニ ユウレイガ ユク」とあった。みんな残念がりながら大笑い。なんともユーモラスな人柄だ。「ひげの生えたパイプ」論に湧く。中村文雄氏の書いた「パイプ」論中心に大議論。お開き後は三階の部屋にビールとつまみ、にぎりめしなどを用意させ、熊倉さんと安部公房のSF「第四間氷期」論争に終始した。私の最も好きな氏の作品のひとつである。

「ひげの生えたパイプ」という題名は、徴が生えた…つまり髭の生えたと単純な発想で提案したものだが、安部氏はしばし考えたが、「ハッハッハいいだろう」と頷かれた。しかし、中村さんによると、「ひげの生えたパイプ」となると、何か別の意味があるそうで、安部氏に聞いてみたが笑われただけだった。しかし、あとで中村さんに、「NHKでよく許したな。まあ正面から反対も出来無かったんだろうが。」と言われた由。誰も説明してくれないので、さっぱり判らない。

1960年(昭和35年)

1月1日(金)

新年特集、安部公房作「くぶりろんごすてなむい」放送。これは、優しいおじいさんと、可愛らしい、しかし頭はいいが意地のわるい兎の共同生活の話。その会話の面白さは、やはり独特のものだ。

32年、父の癌大手術、入退院の繰り返し、介護、その間に会社の倒産、親戚の医師に騒されて祖父からの病院(NHK前にあった長与胃腸病院)を知らぬまに奪われたこと、父の死亡、葬儀、会社の借金の担保となっていた家から追い出されてアパート探し、祖母の扶養、破産などにずっと忙殺されながら仕事を続けて来て前年末には限界に達していた為か、「くぶりろんごすてなむい」についての安部氏との打ち合わせ、演出録音についての記述は全く無い。生活の記録のみ。これ又弁解に過ぎないが。

12月3日(土)

9月に祖母が死亡、叔母たち母を責めて凄絶な苛め、債権者の連日の脅迫、再度の住まい追い出され事件、創価学会の強引な侵入折伏などによって、母極度の絶望と恐怖により発狂、家出。遂に入院させる。そして住まい探し。こうした状態で安部公房氏との打ち合わせは全く出来なかったが、クリスマス特集の産経ホール舞台、ラジオ、テレビ中継という番組提案が安部公房氏作で通過していたので、依頼だけはしてあった。

今日3日、午後安部氏より電話がある由なので、母の病院に行かず待つ。4時半頃、安部氏より連絡あり、新宿にて会いたいとのこと。題名、プロット、セット、衣装(真知夫人にご依頼)配役の打ち合わせ。真知夫人の運転で区内の病院に送って頂く。9時半。

12月5日(月)

朝、病院に行き、午後2時出勤。美術部の多田さんと装置の打ち合わせ。次いで、安部氏ご希望のパントマイマー米山ママ子出演の件、盲目の娘登場の件、モダンバレエ振り付けの件など中村氏に相談、依頼。7時半、調布市仙川の公房氏にNHKのテレビ用原稿用紙を届け、打ち合わせ。

12月8日(木)

移転の準備に忙殺され、帰宅して安部氏に電話したが、開演中にて連絡つかず。風邪ひどくなる。9時、再び安部氏に電話、結果報告と打ち合わせ。

12月10日(土)

新所沢の公団テラスハウスに移転。中村さん手伝った後、夕方安部氏原稿とり依頼。

12月12日(月)

舞台の見取り図、機構などみながら装置、打ち合わせ。キャスティング。作曲打ち合わせ。真知夫人デザインによる衣装デッサンで、東京衣装打ち合わせ。東宝舞台、武田小道具、奥松髪店などに連絡、後日下見。

12月17日(土)

安部公房作「お化けの島」本読み開始。文学座、テアトル・エコー、舞芸座、葡萄の会の混成。非常に面白い。米山ママ子のお化けは台詞なし。ほかにいろいろ個性的なお化け登場。舞台の盆を三つに分けて中央は小山、背景は森、一幕の教室などの打ち合わせしたが、装置プランなかなかまとまらず。何しろテレビ、ラジオの生中継があるので舞台転換の時間がとれないのだ。照明もあまり暗いとテレビに写らないと苦情が出てもめたが、お化けの島があまり明るいのもつまらないのでとにかく舞台中心にして、まだモノクロテレビだったがカラフルにし、スポット多用とする。振り付けの関矢さん、忙しくてなかなか打ち合わせ出来ず。

12月18日(日)

立稽古に入る。22日まで。先生役の南美江、お化け役の米山ママ子、千葉信夫しばしば稽古抜けるので、苛々する。

12月20日(火)

装置プランも完成したので、細かい動き、森や盆の出入り等稽古。盆つまり廻り舞台多く複雑なので、出入りのチェックにかかりきる。振り付け(お化け)も始まる。夜、音楽と歌録音。

12月23日(木)

都市センターホールで舞台稽古。その最中に部長から廊下に呼び出され、バズーカ砲でお化けを撃つてやると言う子供の台詞はアメリカを諷刺するのでいけないと言う。さっぱり判らなかったが、強制的なので、しかたなく安部氏に相談したら、さすがにあきれて居られたが、カットして下さった。又、お化けに手錠をはめるシーンも、犯罪に使う手錠を出すのは良くないと言うので、では玩具の手錠にしてピンクに塗るからと言ったら、それならと許しが出了。舞台では困るが、テレビはモノクロだから、ピンクに塗ってもグレイで変わらない。一人でくすくす笑う。

12月24日(金)

朝、管轄の消防署にお酒持って行って、明日産経ホール前に中継車二台駐車のを許可をもらう。

午後、スケジュール入りの台本六十冊持って産経ホールへ。装置(NHK)、照明(松崎照明)、大道具、小道具、鬘屋、衣装係り、その他、受付、楽屋係り、食堂係り(キャスト・スタッフの食事券配布)ロッカー係り等々六十人に明日の詳細説明打ち合わせ。客

席のテレビカメラの位置決め。楽屋の見取り図もらい、楽屋割りして、帰局。
夜、産経ホールに下見。装置、照明の仕込みを見る。大道具さんに夜食と日本酒数本差し入れ。こうしておかないと、当日意地悪して動いてくれない由。

12月25日(土)

朝、産経ホールで舞台稽古。スポットがつかないので怒鳴ったら、くりからもんもんのお兄いさんが、猫板から何イッと降りてきたから急いで逃げた。

テレビ・ラジオの担当者と打ち合わせ。午後客入れ、3時開演。やはり、小山の上での子供とお化けの会話の場面、スポットがつかなくて、真っ暗の中から台詞だけ聞こえて来るから、テレビの担当者はさぞ慌てたことだろう。もっとも、その方が面白かったかもしれない。安部公房氏も同意見だった。困ったのは、盆の本廻しと逆廻しを一か所まちがえてくれたこと。シーンがおわって休んでいたお化けたちが、慌て、次のシーンのお化けたちが慌てて隣から這い込んで来たこと。困ったけれどすごくをかしかった。中村氏に、盆廻しの係りに付け届けしないで意地悪されたんじゃないのと言われたが、煙草ワンケースやって綿密に打ち合わせした筈だったが。眞知夫人のお化けの衣装はピエロみたいで笑わせた。

1961年(昭和36年)

2月1日(水)

夕方、安部公房氏の家遊びに行く。氏の車で、都市センターホールにモダンダンスの公演を見に行く。米山ママ子に出会う。

4月3日(月)

安部氏のご紹介で、弟子の内田栄一氏に子供劇場の台本を依頼。しかし、アイデアは面白いのだが構成がまとまらず、台詞にめりはりが無い。修学旅行のバスがいつのまにか空を飛び海中に潜ってゆく…一人物設定と台詞の個性が無い。安部氏の家で相談に行くこと二回、心配して安部氏から電話二回、私からの電話二回、三回書き直してもらったが、どうしようもない。

4月5日(水)

とうとう安部氏と相談しながら私が書き直すことになる…。終りがうまく行かず、夜半に安部氏に電話で具体的な指示を仰ぐ。さすがに明快な結末を与えて下さった。徹夜。

9月19日(火)

6時半、安部氏から送られた石川淳の創作ドラマ「お前の敵はお前だ」を俳優座に見に行く。人間の形をした岩など装置は面白かったが、台詞が彼一流のロマン派調で面白くなかった。

1962年(昭和37年)

1月2日

安部公房作「時間修繕します」放送。

1964年(昭和39年)

前年、NHK第一文芸部に移籍。

3月28日

安部公房作「ガラスの罫」放送。

1979年(昭和54年)

1月3日

安部公房作・山元清多脚色「R62号の発明」(音楽宇野誠一郎)放送。

(終り)



さまざまな安部公房

滝口健一郎

＊妄想

真夜中 妄想のなかの安部公房がニコッと笑う
その表情はブレッソンの撮ったポートレート写
真のあの顔だ

笑みを浮かべた安部公房がわたしの脳内に動き
だす……愛くるしい安部さんの顔……やってみ
る？……いけるところまでいってみるか……そ
のようなコトバがわたしの脳に告げるものはナ
ニ？……安部公房に焚きつけられている……気
持ちが高ぶる！！

私の本棚より



[ここでは安部公房に関する新刊はもとより、旧刊でも、感想や批評を、また愛着のある書、自慢の逸品、などについてのエッセイを掲載していき、ファンの交流の場になれば、と思います。皆さまも今一度ご自分の本棚を見回して、これぞという本を取り上げてぜひご紹介くださいませ。写真画像（著作権に注意）の添付も歓迎です。]

ヤマザキマリ著『男性論 ECCE HOMO』の安部公房

タ克蘭ケ

ヤマザキマリさんという漫画家が若い頃にイタリアに絵画の勉強で暮らしていたときに、安部公房の『方舟さくら丸』という作品を特に熱烈に読み、言わばその若さのもたらず、理想と現実の狭間にある苦しい人生を助けられ、凌ぐことができたということは、その文章からよく伝わって参ります (<http://book.asahi.com/reviews/column/2012101500021.html>)。

このブログの記述では、ヤマザキマリさんは、当時も今も、

「かつて留学先のイタリアで貧窮状態に陥っていた頃、私は胃袋を満たせない代わりに安部公房の作品を貪（むさぼ）るように読んだ。安部作品を読む事で惨憺（さんたん）たる自分の生活を漸（ようや）く客観視し、不安定だった精神のバランスを保っていた。イタリアヘルネッサンス絵画の勉強に赴いていながら、恐らく当時の私に最も強い影響力を齎（もたら）したのは安部公房だろう。執拗（しつよう）に読み返してしまう幾つもの彼の作品の中でも、世界3カ所にある住処（すみか）全てに常備してあるかけがえのない本が、先のワープロで初めて書き下ろしたという長編『方舟（はこぶね）さくら丸』だ。」

と書いております。

一度ヤマザキマリさんの『方舟さくら丸』論を読みたいものだと思います。

ヤマザキマリさんが標記の本を出版し、その中に安部公房に言及している箇所がありますので、また、この本をわたしは近頃の流行に乗って紙の書物ではなく、キンドルという電子書籍で読みましたので、その特性を活かしつつ、ヤマザキマリさんの論ずる安部公房、何故そんなにこの作家に惹かれるのかをお伝えしたいと思います。

キンドルという電子書籍は実によくその検索能力に長（た）けていて、紙の本ではあちこちに付箋をつけるところを、安部公房というキーワードで検索をすると、そのすべての箇所が検索されて一覧に供せられるという程に便利にできています。この検索能力を使って、ヤマザキマリさんが惹かれる安部公房の大づかみの特徴は、次のようになっています。

1. ジョブズのいたずら心と陰なる努力
2. 心の師匠、安部公房
3. 辺境感あふれる安部公房
4. アカデミアの洗礼
5. 男子の魅力とは
6. 他人の価値基準から、逃れる

上のような6つの見出しの下に、安部公房が論じられております。

この6つをみると、この漫画家が何故どのように安部公房に惹かれたのかは、よく解るのではないのでしょうか。

1にある通りに、ヤマザキマリさんは、安部公房を、スティーヴ・ジョブズと同格に措いて論じています。同じ格にあるその他の理想の男性像としては、ハドリアヌス帝、フェデリーコ2世、ラファエロ、プリニウス、水木しげる、つげ義春、花森安治といった名前が挙げられています。安部公房も、これらの男性に共通の特性、特徴があるというわけです。

その特性、特徴を、次のように言っています。

1. 「人文系と理科系、ふたつの要素がひとりの人間のなかに共存していること。即物的で現実的な側面を持ちながら、いかにして空想的・イマジネーション

の部分も背負っていける。この二面性が魅力となって表れているひとに惹かれます。」

2。「そしてやはり、時代の趨勢や大多数の価値観から外れている自分自身を、ウジウジ悩まないどころか、武器にかえられるひとがいい。」

3。「ボーダレスなセンスをとことん楽しめる。」

4。「時代の変化を敏感に読み取る直感力と、空想を具現化できる技術を持っている。」

以上のことを、著者は、一言で「男子の魅力」と呼んでいます。

確かに、これらの特徴は、安部公房のものだということができるでしょう。

上記の6つの特徴のうち、4つめの「アカデミアの洗礼」とは、1980年代の当時のイタリアで、学識のある人間達が日本文学の名の下に知っていた日本の作家のひとりに、安部公房がいたということです。この記述を読むと、著者はイタリア人に安部公房を教わったということになります。また同時にこの時期に、同様にして、エリアス・カネッティも教わったことがわかります。こういう、作家達との出逢い方というのも、誠にヤマザキマリさんらしいと思います。

ヤマザキマリさんが、この著作の中で、日本の戦後の歴史を振り返って憧れるように語っている、ご自分では経験したことの無い1960年代は、誠に「振り幅を広く持ち、一人ひとりの世界観が広く確立していないと成立しなかったあの時代に生きていたら、もっといろんな触発を受けて、もっとすごいエネルギーが湧いていたんじゃないかと、夢想するのです」と語っている通りに、当時子供であったわたしにも時代の熱気とエネルギーは十分に伝わって来ておりました。わたしの父親の世代の男達は、自分の人間としての成長と日本の国の経済の成長と、誠に幸福なことに、その軌道を一にして生きることができておりました。毎日会社に行って、土曜も日曜もなく、一生懸命仕事をするのが楽しくて楽しくてしょうがないという、そのような大人達の姿をわたしはよく記憶しております。そのように一心不乱に働いて、現下不況に苦しむ日本国とはいえ、この国の戦後の基礎を築いたのです。この時代のエネルギーの凄さは、クレージー・キャッツの植木等主演の無責任男シリーズの映画を観ると、よく伝わって参ります。

ヤマザキマリさんは、スティーヴ・ジョブズの伝記を漫画化するなど現在多忙を極めていらっしゃいます。作家のお時間の生まれたときに、当時イタリアで「心の師匠」であり、長い間「理想の男子」であった安部公房の姿を、『方舟 さくら丸』などを通じて、語っていただくことを、願うことに致しましょう。



Maecenas pulvinar

三島由紀夫の『愛の処刑』と安部公房

岩田英哉

安部公房と三島由紀夫が、お互いにところが通い、肝胆相照らす仲と交情のあったことは、「二十世紀の文学」という対談を読むと、よく読者に伝わって参ります（全集20巻、55ページ）。

この対談の冒頭で、最初から、三島由紀夫が安部公房に向かって、「性の問題だね、結局、二十世紀の文学は。」と言い、この真っ向からの言葉を受けて、安部公房が、それを言語の問題に変換して、その太刀を受けてみせ、「それと、ことばの問題だろうな。ことばとイメージの関係……。」と返すところは、このふたりの藝術家の、深いところでの関係を象徴的に示していると、わたしは思います。

安部公房と三島由紀夫の関係は、安部公房が大江健三郎との「対談」（全集第29巻、73ページ）で述べている所が、正鵠を射る発言になっています。その箇所を引用します。

「安部 確かにそう。でも三島君って、変わり者だった。思想と人格が、完全に分離していた。思想は気に入らなかったけど、人格は好きだったな。

大江 あなたのことも好きでしたね。（略）

安部 そうね、西欧が日本に投影するものに彼がのった、といわれれば「なるほどな」と思います。でも、彼には演技と現実の区別がつかなくなるような不思議なところもあって……。」

（略）

安部 そう、上手な似顔絵みたいな……。でも三島の美学、僕は嫌いだな。彼との接点は、全部うらがえしになっている。」

安部公房という人間も、世間の尺度から見ると相当に変わり者だとわたくしは思いますが、その変わり者に更に変わり者と言われた三島由紀夫は、やはり安部公房に何か通っているのでしょう。変わり者同士がお互いに好いたということであり、その関係がお互いに「接点は、全部うらがえしになっている」という関係であったということになります。

このことを、安部公房の実存の理解との関係で論じたいと思います。

『錨なき方舟の時代』という対談で、安部公房は次のように述べています（全集第27巻、167ページ下段）。1984年。安部公房、60歳。

「—安部さんが戦中、ハイデッガーとかヤスパースとか、そういうものを非常に熱中してお読みになったということと、文学へ進んでいくこととは関わりがありますか。

安部 あったと思う。実存は本質に先行するという実存主義の基本概念、本質というのは一つの規定観念であり、その規定作業の前にもっと未分化の実存が先行しているという考え方、それがなぜぼくにとってそれほど重要な思想だったかという、やはり戦争中だったからだと思う。」

この、実存とは未分化の状態であるという考えは、安部公房の独自の実存の考えです。大東亜戦争敗戦後の日本に実存主義が流行しましたが、ほとんどの人間は、ただ「実存は本質に先行する」というお題目を唱えただけで終わりました。しかし、10代の安部公房はこの考え方の本質を、そのリルケ理解と合わせて軌を一にして、言語表現との関係で、実に深く、本質的に理解をしておりました。それが、「未分化の実存」という考えです。

この同じ考えを『名もなき夜のために』では、次のように語っています。

「（略）気をつけてみれば、どんな傷からでも、生と死を含めた全存在の傷が成長するのに気づくはずだ。これが貧しい僕にはせい一杯の贈物であるらしい。

そしてもしそれが役立つものだとすれば、負数の時間を歩むことは丁度人間が胎児のあいだに生物の全歴史を繰返すように、すべての人に繰返される物への復帰の道だと考えてみたらどうだろう。死は生のおわったところにあるのでなく、その二つは常に等量に保たれていてその間の振幅が現世であるように、正数の時間は等量の負数によって僕らを絶えず脱皮させるのではないかと……。」

この世に生まれ出ることなく、いつまでも胎生の状態でいて、分化しない状態にあること、この世にあることが生であるならば、生よりは未生の状態に我が身を置くことです。従い、性的には、男性にも女性にも分化することがない状態ということになります。

さて、このような自己を意志的に敢えて未分化の状態におき、従い、社会的には自己を放棄して、全く無名の人間であることを生きようとし決意した安部公房の

考えは、女性に関しては、次の2種類の女性を愛するという事に結果しました。これ勿論、このような人間としての安部公房の性欲のあり方に深く関係しております。

安部公房の好んで描いた女性には、典型的に二人の女性がいます。

一人は、成熟した性的魅力を横溢させている、敢えて誤解を恐れずに言えば、娼婦のような性的に成熟したエロティックな成人の女性が、一人の典型です。『箱男』の看護婦、『密会』の副院長の女秘書、『方舟さくら丸』のサクラの女性、『カンガルー・ノート』のトンボ眼鏡の看護婦、『飛ぶ男』の小文字並子等々。

もう一人の女性は、わたしは偏奇な少女と呼んでいるのですが、一寸普通ではない少女、即ち性の分化する前の女性で、また女性になっていない、性的には未分化の状態にある女性で、何か普通の子供とは違う少女です。『他人の顔』に出て来る、主人公が二つ目の住まいを借りるアパートの管理人の娘、『密会』の溶骨症の少女、『カンガルー・ノート』の垂れ目の知恵おくれの少女等々。

この後者の少女、未分化の状態の女性、敢えて言えば実存の状態を体現した少女が、安部公房の好きな女性にぴったりとした不思議の国のアリスであるのに違いありません。

さて、これは、後年の、20代以降の安部公房の性的なありかたですが、10代の一番多感な時期に、この未分化の状態という実存の理解とその意志的な持続の努力は、やはり男色に傾くことがあったことを示す書簡がありますので、引用します。当時哲学的な議論をした親しき友、中埜肇宛書簡第5信です（全集第1巻、92ページ）。

「それからもう一つ。或る意味では旅行の直接的原因であり、且つ旅其のものには一向に関係の無い事について一言御話しませう。きつと意外に思はれる事ませう。いや、若しかしたら君の事ですからすつかり御存じたつたかも知れませぬ。でも兎角僕の口から云ふのはきつと、これが始めてでせう。……。それは高谷の事なのです。僕は実は、今だから申し上げますけれど、彼に対しては興味と云ふよりは愛に近いものを感じて居たのです。それで僕は彼の美を恐れて居ます。彼の存在は僕に取つてあらゆる意味で苦痛です。どうか、あの——若し、おぼへてあられたら——伯父ワーニャの中の医師・アーストロフの言葉を思い出して見て下さい。

それで旅行に出る前に僕は彼に対して、ある意味で絶交を求める意味の手紙を

出したのです。勿論歸つて来るや、君の葉書と一緒に、彼の同じ様な意味での同意の手紙を受取りました。」

つまり、理屈でいいますと、未分化の状態の人間（男）は、男性を愛することと女性を愛することとの可能性を等分に秘めているということなのです。前者の場合は、その人間が分化すれば、男が男を愛するという男色になり、後者の場合には社会的に普通の異性愛の人間になるということになります。

先入観なくものをみれば、愛には同性愛と異性愛とふたつがあるということになるでしょう。

さて、話を転じて、三島由紀夫の『愛の処刑』という作品を見てみましょう。これは、榊山保という変名のもとに書かれた男色の小説です。これは、「決定版 三島由紀夫全集 補巻」に採録されておりますので、三島由紀夫のものだ考えてよいでしょう。少し廻り道を致しますが、『薔薇族』という男色、今風の言葉でいえばゲイの読者を対象にした雑誌の編集長であり発行人でいらした伊藤文學さんの著書『『薔薇族』の人びと その素顔と舞台裏』（河出書房新社、2006年7月20日初版。72ページ）から関係する箇所を引用します。

「『愛の処刑』をかつて読んだ人の数は五百名どまりであろうと思われるが、そのうちのごく一部の人たちには作者・榊山保は三島由紀夫の変名であると信じられている。

同性を愛する男たちの秘密の会が加齢なメンバーで十幾年か前に六本日に存在していたことは以前書いた。そこでは非合法のホモ・ポルノ・マガジンがごく少数発行され、ほんの一握りの男たちに読まれては闇に捨てられていた。

「愛の処刑」もその地下出版物APOLLOに掲載された。

それらの編集をしてきた人物に近い筋から、当時少しづつ、会員の三島氏の作品であるらしいことを匂わされて、噂は広がった。広がったといっても、たかだか三十人くらいの間だけのことではあるけれど……。」

会員制男性同性愛の会「アドニス会」の雑誌、「ADONIS」別冊「APOLLO」5号が刊行されたのが1960（昭和35）年10月。この会員制の機関紙別冊号に榊山保という名義で『愛の処刑』は発表されました。後に、この小説『愛の処刑』は1973（昭和48）年5月号の「薔薇族」にも掲載され、世間に公表されたのです（ブログ「空閨残夢録」より：http://blogs.yahoo.co.jp/honeymoon_stardust2006/32009638.html）。

この小説は、年上の20代と思われる筋骨隆々たる小学校体育教師の若者と、小学生の美少年の恋を描いたものです。

男色者の体育教師の、小学生の美少年との恋愛と、そしてその美少年に使喚されて、美少年の眼の前で、体育教師が割腹自殺によって死に至る過程が描かれています。

ここにあるのは、男の純情と純潔、無垢な恋愛感情ということになるでしょう。女性と交わることはむしろ、童貞を失うわけですから、それは不純であるということになります。

年端もゆかぬ、美少年の命令に服する感情は押さえ難く、それは絶対命令として主人公に働き、主人公は、恋情を覚えて、その恋の対象としていた美少年の凝視する前で、切腹をして、快樂と苦痛の中に血を流すのです。

美少年は、まだ男になる前の、性的に未分化の状態の男子です。このことは、作者、三島由紀夫にとって、深い意味があったのだと思われます。

男と交わる、あるいは男の言葉に忠実に男が服従して、性的な快樂を得るということは、男の快樂と美の極地なのでしょう。それは、閨房で女性の言葉に従う男の感情とは、別天地の感情なのでしょう。

今、ここまで書いて来て、三島由紀夫と安部公房の共通した、藝術家としてのあり方を一言で言えば、性の未分化の状態である男と女というものを理想の人間として念願し、それを主人公にして小説を書いて来た作家だということになります。

安部公房の譬喩の能力も、三島由紀夫の修辞の豊かな能力も、ここに淵源があると、わたしは思います。

三島由紀夫が16歳のときに書いた処女作『花ざかりの森』のエピグラフは、次のようになっています。

「かの女は森の花ざかりに死んで行った
かの女は余所（よそ）にもっと青い森のある事を知っていた
シャルル・クロス散人」

森の花盛りの中に、生をではなく、死を考え、余所にある、花盛りではなく、それ以前の状態にある「もっと青い森」のあることを知っている、シャルル・クロス散人という、散人という名前からして無能の人物の、そして無能ということから安部公房のすべての主人公に通じる、そのような人間の言葉として引用されたこのエピグラフの「もっと青い森」とは、同じ10代で安部公房の洞察によって我が物としていた「未分化の実存」と正確に照応していると、わたしは思います。

同じ人間の在り方、また10代の自分の人間としての在り方について、更にまたその在り得るべき在り方について、『問題下降に依る肯定の批判』を書いた16歳の安部公房は、哲学的にそれを「未分化の実存」と理解し、他方、16歳で『花ざかりの森』を書いた三島由紀夫は、同じ戦時中の空気を吸いながら、同じことを修辭的に「もっと青い森」と言い表したということになります。

ここに、「彼との接点は、全部うらがえしになっている」と安部公房が後年言うところの最初の接点があります。

アメリカの詩人でHart Craneという男色の、素晴らしい詩を書く詩人がおりますが、この詩人は、その詩を男色者の隠語を使って暗号化して詩を書きました。これは、当時19世紀末から20世紀初期にあってまだ男色に社会的な偏見があり（勿論今でもあるでしょう）、それを職場で知られたら即座に職を失うという恐怖心のなせる業でもあったことでしょう。その恐怖心は、その詩からも読みとることができます。

わたしはこの暗号を相当程度に深く読み解き、解読して1冊の本を書きました（『Gay詩人、Hart Craneの暗号を解読する』：<http://goo.gl/KmAQ41>）、この詩人から学んだことによれば、単に社会的な抑圧から身を守るためだけではなく、言語の粋を極めた藝術的な能力を発揮するために、男色の藝術家は必ずその言語表現に男色者の隠語を用いて、男色の感情と論理を、普通の異性愛

の人間達には決して解らないやり方で、暗号化するものなのです。

この詩人の10代後半に書かれた「He has woven rose-vines」で始まる無題の詩を読み、その暗号化の規則に従って読みますと、既にこのとき、この詩人は大人の男色者から男色の道を教わっていることがわかります。

[註]

男色者たちの隠語のうちの最たるもののひとつは、橋 (bridge) という言葉です。Hart Craneは、Brooklyn Bridgeという題名の、背徳と瀆神の壮麗な詩を書いておりますが、この橋という言葉の裏の意味は、夜な夜なニューヨークという都会の地下室で男色者達が肛門性交によって数珠つなぎになるその様を言い表しています。日本人の男色の詩人も、この橋という言葉を通じて詩を書いていますので、これは世界中の男色者たちが、それぞれの言語で、共有している言葉なのでしょう。

この種の例を挙げれば、Elton Johnの名曲、Good by Yellow Brick Roadという題名も、brickが男性の一物であることからして、文字通りにbrick roadとは男色の道ということになり、その道がyellowであることに、男色者の裏の意味がかけてあるのです。これが、わたしが暗号化するということの解り易い例です。わたしはまだ深く探究をしておりますが、男色者は男色の色 (色彩) の体系を隠し持っております。

こうしてみますと、Good by yellow brick roadの歌の中に出て来るmy old manという男もまた意味深長な登場人物に思われます。

三島由紀夫の『花ざかりの森』のエピグラフの2行のうち、特に2行目の「もっと青い森」という慎重に選択された言葉の裏には、既にこのとき男色を知っていたかもしれないという可能性を、そのような詩人の世界を知っている私をして思わしめるものがあります。

三島由紀夫はその作品の中に、そのような暗号を散りばめているのではないかと考えることができます。

男色者は、隠語としての色彩の体系を持っておりますので、通常の異性愛の人間の世界での青という言葉の意味の持つ世界と裏腹に、隠語としての青色があるのではないかと考えることができます。そう考えれば、何故「もっと青い

森」といい、「もっと」という言葉を付加せずにはいられなかった三島由紀夫のところがわかるのではないのでしょうか。普通に考えれば、「花ざかりの森」という表現に対しては、「青い森」といってこの言葉を対置すれば充分である筈だからです。

性の未分化という人間の状態が、どれほど豊かな藝術的な果実をもたらすものか。

2013年2月20日の安部ねりさんと加藤弘一さんのトークライブをレポートしてくれたホッタタカシさんの文章「安部公房に缶切りを！ー安部ねり&加藤弘一トークライブ報告」（もぐら通信第6号：<http://goo.gl/yDDiT6>）によれば、安部ねりさんの言として、「本当にウマの合った二人だった」とその「幸福な交友関係」に触れているというのも、むべなるかなと思います。

見かけ上は、左翼と右翼のように見られているふたりですが、人間というものはそのような皮層なものではありません。

同じレポートによれば、安部ねりさん曰く、「安部公房の友達は右翼が多かったな」とのこと、これは、わたしには、如何にも安部公房らしいと思われるのです。

[註1]

『燃えつきた地図』の中に、闇の世界の河原でのこととして男色者たちの世界が、深くはありませんが、描かれていることは、10代の書簡にあった安部公房の嗜好が、後年になって表れたものと理解することができます。

[註2]

三島由紀夫が新潮社文庫の『花ざかりの森・憂国』の後書きでみづから筆を執って、この『花ざかりの森』に対する後年の感想を次のように書いています。

「もう一つの戦時中の作品『花ざかりの森』を、これ（筆者註：18歳のときに書いた『中世に於ける一殺人常習者の遺せる哲学的日記の抜粋』のこと）と比べて、私はもはや愛さない。一九八四一年に書かれたこのリルケ風な小説には、今では何だか浪漫派の悪影響と、若年寄のような気取りばかりが目について仕方がない。」

同じ年齢のときに、安部公房はリルケの詩を読み耽っていたわけですし、きっと三島由紀夫もリルケは読んでいたのでしょう。こうしてみますと、後年の安部公房による

リルケについての消極的な感想といい、この三島由紀夫の「リルケ風の小説」という言葉に続く消極的な言葉といい、その出自とその後年の感想に互いに反響し合うものを持っていたということができるでしょう。しかし、他方、それぞれの処女作は処女作であり、後年どんなに作家自身が消極的な評価をしたとしても、その作家のすべてが表れているという格言は、否定することができません。

さて、このように書いて来て、最後に、安部公房と三島由紀夫の接点で、あらゆる点で正反対であった接点を、思いつくままに列挙して、終りと致します。それぞれについては、また個別に論を立てたいと思います。

- 1。軍隊と制服
- 2。死と性愛（エロス）
- 3。言語による命令と服従（これは、1と2に大いに関係あり。）
- 4。思考の振り子を両極端に振ること。
- 5。4の思考により豊かな譬喩（ひゆ）を創造すること。
- 6。現実に対して、ふたりの生み出す主人公は、無能力（impotenz）であること。
- 7。6に多いに関係があるけれども、世間に対する藝術家の持つ倒錯性
- 8。組織の生（軍隊、国家）と個人の死
- 9。夜
- 10。仮面（贗の顔）
- 11。少年愛（安部公房の場合は未分化の状態から少女愛（不思議の国のアリス）に変形している。その現実的な実在が、女優（変身する演技者）としての山口果林であったものと思われる。）
- 12。純粹、純潔（これは性的な「未分化の実存」、「もっと青い森」ということから招来される。）
- 13。演技と演劇
- 14。儀式



もぐら通信の編集部員を募集します

編集部

新たにもぐら通信の編集者を募集致します。募集の要領は、次の通りです。

1. 募集人員

1名

2. 募集要件

- (1) 安部公房が好きであること。
- (2) 編集方針を大切に下さること（*）。
- (3) 無給であることを承知下さる事（逆に毎月2000円程度の持ち出しになります）。
- (4) 無償の奉仕ができること。

（*）【もぐら通信の編集方針】

1. われらは安部公房ファンの参集と交歓の場を提供し、その手助けや下働きをすることを通して、そこに喜びを見出すものである。
2. われらは安部公房という人間とその思想およびその作品の意義と価値を広く知ってもらうように努め、その共有を喜びとするものである。
3. われらは安部公房に関する新しい知見の発見に努め、それを広く紹介し、その共有を喜びとするものである。
4. われら自身が楽しんで、遊び心を以て、もぐら通信の編集及び発行を行うこととする。

3. 編集部員の仕事

- (1) 校正、校閲、査読
- (2) 寄稿者とのコミュニケーション
- (3) もぐら通信を印刷し、配付（メール便等）する業務（掛かった費用は後日、各編集者が均等な負担金額になるように精算をします）
- (4) 原稿の執筆
- (5) その他のもぐら通信の編集と発行に関するすべての業務

4. 募集対象者

- (1) 年齢：不問
- (2) 性別：不問
- (3) 人種：不問。日本語が充分にできれば人種を問いません。
- (4) 住所：国内海外を問わず。

5. 要求される能力

- (1) PCのスキル：普通にPCが使えること。OSは不問とします。
- (2) アプリケーションのスキル：ワード、エクセル、OpenOfficeの初級程度の操作
- (3) もぐら通信を印刷し、配付すること。
- (4) 編集部の資産とも言うべきDropbox中の書類群を閲覧し、処理する権限を賦与されますので、相応に注意深く、思慮あること、常識あることが求められます。
- (5) 企画ができれば尚よし、です。

6. 応募先

- (1) 宛先：岩田
- (2) 電子メールアドレス：eiya.iwata@gmail.com
- (3) 件名欄に、「もぐら通信編集部員応募」とお書き下さい。

7. 面接

岩田（タクランケ）と岡（アレン）とでスカイプでの面接を行います。

8. 締め切り

必要な方が採用され次第、締め切ります。



[ご寄稿に際してのお願い]

編集部

いつも貴重なご寄稿をいただき、まことにありがとうございます。
まず今後の原稿締切日についてお知らせします。よろしくお願いしま
す。

21号 5/23(金) 22号 6/27(金) 23号 7/25(金)

さて、お届けいただきました原稿のその後の訂正につきましては、編集
の都合上、次のようにお取り扱いさせていただきたく、ご了解のほどを
お願い申し上げます。

- ・訂正事項を見出された場合、出来るだけ早くお知らせ下さい。
- ・編集上の初版が成った後での語句や表現の訂正依頼は、反映できない
ことがありますのでご了解下さい。
- ・しかし重要な事実誤認や錯誤の訂正については、可能な限りギリギリ
まで受け付けます。

以上、何とぞよろしくご協力をお願いします。

[訂正箇所]

第19号の稲垣健さんのご寄稿「安部公房---乏しき時代 (Die dürftige Zeit) の作家」に誤植あり、次のように訂正を致します。

P10

下から8行目

「同情する、。」 → 「同情する。」

P15

上から17行目

「全身身が震いするような、」 → 「全身身震いするような、」



読者からの感想

もぐら通信を発行していて、読者の方からの感想ほど、うれしいものはありません。以下に転載して、もぐら通信の読者のみなさんにも、ご覧戴きたく思います。一部は要約させていただきました。

メール配信担当：岡篤史

内藤由直先生より（要約）

岩田英哉様 もぐら通信編集部御中

いつもお送り頂きありがとうございます。

今号も興味深く拝読しました。「長与日記」まだまだ続きそうで期待しています。

岩田様の「安部公房と谷崎潤一郎」も面白かったです。

両者の繋がりなど考えもしなかったので意外な接点に驚きました。

次号も楽しみにしております。



桐原正二様より

もぐら通信編集部の皆様

もぐら通信19号をお届けいただきありがとうございます。

岡田裕志さんが編集部を辞任されたとの報せは、読者としてもとても残念な報せでしたが、これまで我々安部公房ファンにたくさんの情報や知識をわけて下さった岡田裕志さんに、心から感謝いたします。

ところで、私は九州に住んでいるのですが、先日、安部公房のお墓と仙川の家（の跡地）を訪ねる旅をしてきました。とても有意義な旅でした。

立派な墓石が建ち並ぶ霊園の中に、一か所だけ妙にすっきりした空間があり、そこには何の文字も刻まれていないただの小さな石。それが安部公房のお墓だと気付いた時には、驚きと納得と感動が順番に心に湧き起こりました。

仙川の家は残念ながらもう解体されていて、私が訪れた時は瓦礫を撤去しているところでしたが、それでもガレージや玄関へ昇る階段などは見ることができました。

道路の狭さ、ガレージの狭さ、きっと車庫入れは大変だっただろうな、というようにつまらない事を考えながら、「世界的に著名な大作家先生の邸宅」のイメージからはまったくかけ離れた、このありふれた住宅密集地にある跡地に、やはり安部公房らしいインスピレーションを感じていました。

実はこの20年、いつかはこのふたつの場所を訪れたいと思い続けていたのですが、もぐら通信を中心とする情報のおかげでその正確な場所を知ることができ、ついにこの度、その願いを叶えることができたのです。本当にうれしかったです。

もぐら通信の編集、発行の作業はきっと大変な作業だろうとお察しします。私はその恩恵を受ける事しかできませんが、どうぞ、お体に障らぬよう、これからも、安部公房の世界と一緒に楽しめるよう願っております。

桐原正二

感想の募集

もぐら通信では、読者であるあなたの感想をお待ちしております。

もぐら通信を読んだの、どんな感想でも構いませんので、お寄せ戴ければ、ありがたく存じます。

お寄せ戴くどんな言葉も、もぐら通信発行の励みとなりますし、また他の読者の方達との共有の財産となり、わたしたちの交流を深めることでしょう。

お寄せ下さる場合には、もぐら通信に掲載してよいかどうかを付記して下さい。

掲載の許諾を戴けたら、次号に掲載したいと思えます。

編集部一同、こころからお待ちしております。

連絡先：eiya.iwata@gmail.com

【合評会】

第19号、第20号の合評会を近日中に、「もぐら通信掲示板」で開催します。

<http://8010.teacup.com/w1allen/bbs>

【本誌の主な献呈送付先】

本誌の趣旨を広く各界にご理解いただくために、安部公房縁りの方、学者研究者の方などに僭越ながら本誌をお届けしました。ご高覧いただけたらありがたく存じます。（順不同）

安部ねり様、渡辺三子様、近藤一弥様、池田龍雄様、ドナルド・キーン様、平野啓一郎様、宮西忠正様（新潮社）、富澤祥郎様（新潮社）、北川幹雄様、三浦雅士様、鳥羽耕史様、加藤弘一様、友田義行様、内藤由直様、番場寛様、田中裕之様、中野和典様、坂堅太様、ヤマザキマリ様、小島秀夫様、頭木弘樹様、高旗浩志様、島田雅彦様、円城塔様、藤沢美由紀様（毎日新聞社）、赤田康和様（朝日新聞社）、富田武子様（岩波書店）、待田晋哉様（読売新聞社）、安部公房文学室様、日本近代文学館様、全国文学館協議会様など

この他に献呈をさせて戴くべき方がありましたら、ご推薦をお願い致します。

【もぐら通信の収蔵機関】

国立国会図書館、日本近代文学館、
コロンビア大学東アジア図書館

【もぐら通信の編集方針】

1. われらは安部公房ファンの参集と交歓の場を提供し、その手助けや下働きをすることを通して、そこに喜びを見出すものである。

2. われらは安部公房という人間とその思想およびその作品の意義と価値を広く知ってもらうように努め、その共有を喜びとするものである。

3. われらは安部公房に関する新しい知見の発見に努め、それを広く紹介し、その共有を喜びとするものである。

4. われら自身が楽しんで、遊び心を以て、もぐら通信の編集及び発行を行うこととする。

【個人情報保護に関する方針】

ご登録いただいた個人情報は、厳重に管理し、「もぐら通信」に関すること以外に使用しません。

【もぐら通信のバックナンバー】

もぐら通信のバックナンバーは、安部公房解読工房blogの以下のURLアドレスからダウンロードすることができます。

<http://w1allen.seesaa.net/article/393863890.html>

【もぐら通信のwiki】

「ニュース&記録」

<http://seesaawiki.jp/w6allen/>

「もぐら通信総目次・索引」

<http://seesaawiki.jp/w5allen/>



編集者短信

もぐら通信の編集者は何をしているのか？

○今号で最終回となった長与日記は、安部公房と長与孝子氏の両名の人となり、番組制作裏話が読めて、とても貴重な資料だったと思います。

○積ん読派の私は、買ったまま、手を付けられないことが多々有ります。ゲームもそうで、積みゲーと言われます。近所のゲームショップで、半額セールをしていたので、誘惑に負けて、4本購入してしまいました。

○最近、また体重が増えてきました。間食を控えねば！

○ある目的で、中古のノートPCを購入。正面にメインPCのディスプレイ、側面にテレビとノートPCの三面鏡状態（笑）

○大阪の造幣局の桜の通り抜けに友人と行ってきました。八重桜など様々な桜と多くの人々と屋台で、ごったがえしでした。無料ですので、近隣の方は来年足を運んでみては？もっとも、安部公房は、桜に嫌悪感を抱いていたようですが。

[wlallen]

前号にMac OS Mavericksをダウンロードしてインストールしたら、Pagesというこのもぐら通信を編集するに大変重宝なアプリケーションの使い勝手が悪くなったということを書きました。しかし、その後最新版をダウンロードしたところ、その使い勝手の悪さが直っていて、ひとつのページをサムネイルで複製ができるようになっておりました。それは、そうだろうなあと思った次第。世界中のMac usersからApple本社に非難轟々の嵐が吹き寄せたことでしょうか。しかし、まづはめでたしめでたし、です。●この黄金週間の目標のひとつに、ドイツ語の文法書を読み直すというのがあります。何故かドイツ語の文法書を読むと、頭の中がすっきりとするのです。思えば、ドイツ語の文法で世界を解釈しているのだと思います。巻末の書き込みをみると、前々回は2006年6月1日に読み、前回は2011年5月4日に読んでいます。今回は3年振りということになります。●世上流行しているNISAなるものを、わたしもやってみようと、生まれて始めて証券会社に口座を設けました。金儲けとは縁のない生活をして来たわたしですが、さてどうなるか。乞うご期待です。

[タ克蘭ケ]



【編集後記】

今号も多彩な方々よりご寄稿を戴きました。友田先生の大切な講演記録は有難く、ご寄稿に感謝致します。また滝口健一郎さんの独特の語り口は、いつもながら魅力的です。長与日記は惜しくも今号で終わりました。実に貴重な記録で、読者も楽しまれたことと思います。また、桐原さんが安部公房のお墓と旧居を訪れたこと、それがもぐら通信からの情報によったということを押見し、御役に立ったことを率直にありがたいと思いました。●新しい編集部員の募集の掲示を今号で致しました。これももぐら通信が次の段階に移るために必要とする人材の募集です。どのような方にお会い出来るのか、楽しみに応募をお待ちしております。ご関心、ご興味のある方は、ご応募下さい。インターネットの四通八達した時代ですから、どこにお住まいであろうとも構いません。或いは海外でも。●みなさまのご寄稿をお待ち致します。●爽やかな季節とはなりました、早や5月、さつきです。よい黄金週間をお過ごし下さい。

[岩田英哉]

もぐら通信編集部 連絡先: eiya.iwata@gmail.com

テキストを入力してください

差出人:

廣安部公房

〒182-0003東京都調布市若葉町

「閉ざされた無限」

次号の原稿締切は5月23日(金)です。ご寄稿をお待ちしています。

次号の予告

次号では、次の記事を予定しています。

1. 『けものたちは故郷をめざす』小論: wlallen
2. 安部公房の俳句論: 岩田英哉
3. その他のご寄稿